黒羽芭蕉の館だより⑳

奥の細道画巻（複製）

今回は、現在「芭蕉展示室」にて展示中の「奥の細道画巻」（複製）を紹介します。本作品（二巻）の原資料は、逸翁美術館（大阪府池田市）所蔵で、重要文化財に指定されています。

元禄2年（1689）3月、松尾芭蕉は弟子の曾良を伴い江戸を出発し、東北・北陸を経て大垣まで5カ月間にわたる旅をします。この旅を踏まえて、芭蕉の傑作『おくのほそ道』が成立しますが、「奥の細道画巻」は、与謝蕪村（1716～83）がこれを書写し、そのなかに自身の想像する画15図を挿入して長大な絵巻物としたものです。

芭蕉に憧れていた蕪村は、芭蕉没後の俳諧退廃期にあって「芭蕉に帰れ」と提唱し、清新で感覚的な俳諧詩の独自世界を構築していきました。同時に彼は「俳画」という新たな芸術様式を開拓し、池大雅とともに日本南画の大成者と評されています。

芭蕉百回忌が近づく安永8年（1779）10月、64歳の蕪村は、敬愛する芭蕉への賛歌として、この「奥の細道画巻」を制作したのですが、彼は安永6年からの約3年間で同種の作品を十余点描いていたのです。そのうち、実在が確認されている作品は4点あり、今回の作品もそのひとつです。

ふっくらとした筆跡のかな文字が目立ち、緊張感ある筆の運びのなかに、墨画淡彩が施された情感あふれる挿入画が程よい間隔で配置されています。「那須野」の章に配される画は、農夫から提供された馬に乗る芭蕉と随行する曾良、そしてそのあとを追う2人の子どもとなっています。少女「かさね」との出会いの場面で、原作の感動部分のひとつです。

奥の細道画巻（複製）の「那須野」の場面

■問い合わせ
黒羽芭蕉の館
TEL（54）4151

彫刻周遊㊷

市内で作られた作品とその作者

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介します。

この作品は若草の十字路にある大田原保健センターの入口に設置してある作品です。

高さは約2メートルと、一般的な女性よりもやや大きめな裸婦像で、体のラインも全体的にぽってりとふくよかに仕上げられています。

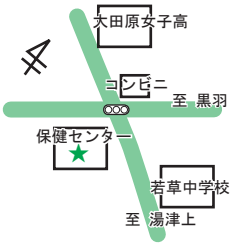
その顔には詳細な表情付けはされておらず、見ようによっては凛と彼方を見つめているようにも、また、少し曇った表情のようにも見てとることができます。

「原木の持つエネルギーに圧倒され口をつぐむ。溢れてくる木の魅力を感じながら毎日木にむかった。」図録の中で、作者はそう言い残しています。もしかすると、巨木を前にした作者は、その原木から力強さと共に、母親のようなぬくもりを感じて、それをふくよかな女性の像として表現したのかもしれません。そう考えると、作品の題も硬く男性的なイメージを持つ漢字ではなく、わざわざひらがなの「おんな」と名付けたのも納得できるような気がします。

おんな
松﨑（まつざき）　織子（おりこ）　日本　2003年

松﨑 織子 氏

設置場所案内図（★印）



作者は松﨑織子氏。東京都出身。東京造形大学造形学部に在学中、第65回新制作展に初出品、同新作展にて新作家賞を受賞しました。2007年には有名な中之条ビエンナーレにも出展されたそうです。

■問い合わせ
文化振興課文化振興係　TEL（23）8718